

富岡美子作 「フレッシュマン・エレジー」

効果音 (礼拝の最後の頌栄・祝.)

司会 これで礼拝を終わります。ご自由にお交わりください。

吉川浩(モノローグ) 今日も杉山、来てないな。一体どうしたんだろう。

中野真一 吉川君。吉川君。

浩 はい。なんでしょう？

中野 考え事してたようだけど、何か悩みでもあるのかい？

浩 いえ、別になんでもないんです。

中野 そう。それならいいんだけど。あ、そうそう。今日も杉山君来てないようだったけど、吉川君、何か聞いていない？

浩 はい。僕も気になっていたものですから、杉山の家になん度か電話したんですけど、いつも杉山いないんです。

中野 彼、忙しいのかな。わたしからも電話してみようか？

浩 いえ、僕がもう一度電話してみます。

中野 うん。じゃ頼むね。それから今日の青年会でも、みんなに彼のこと祈ってもらおう。

浩 はい。

ナレーション 吉川浩は、この4月から社会人1年生。今までの学校生活とは違い、毎日が緊張の連続でした。そのような中であって週に1度の礼拝は、彼女に真の慰めを与え、教会は安らぎの場でした。また彼は、高校を卒業してほとんど会えなくなった杉山洋一と会うことのできる日曜日を待ち遠しく思うのでした。2人は高校時代からのクラスメート、また信仰の友でもありました。浩は中学2年の時クリスチャンとなり、洋一は浩に誘われて教会へ行くようになり、去年の夏のキャンプでイエス・キリストを信じる決心をしたのでした。それから二人は毎週欠かさず礼拝に出席していたのですが、4月に入ってからここ3週続けて、洋一は何の連絡もないまま礼拝を休んでいるのでした。

効果音 (電話の呼び出し音)

洋一の妹 (フィルター音) はい、杉山です。

浩 僕、吉川ですけれども、こんばんは。今日は洋一君いらっしゃいますか？

洋一の妹 (フィルター音) 兄ですか？ はい、いますよ。ちょっとお待ち下さい。お兄ちゃん、お兄ちゃん、吉川さんから電話よ。早くしてよ。

浩 もしも、杉山君？ 久しぶり。どうしたの、3週間続けて礼拝休んだりして？ それに何回も電話したのに、いつもいないんだ。仕事大変なのかい？

杉山洋一 (フィルター音) いや、別に。

浩 教会の人たちみんな、杉山のこと心配してるんだよ。

洋一 (フィルター音) そう。

浩 なんか元気ないみたいだけど、どうしたの？

洋一 (フィルター音) どうもしないよ。

浩 それだったらいいんだけども。ねれえ、明日の夕方、久しぶりに会わないか？
ゆっくりお話ししたいし。会社のこととか、いろいろなこと。それから教会の週
報も渡したいし。

洋一 (フィルター音)あした？ あしたはダメだ。

浩 何か用事あるのかい？

洋一 (フィルター音)何もないけど。

浩 だったらいいじゃないか。

洋一 (フィルター音)おれ、今、だれとも会いたくないんだ。

浩 どうして？ 会社で何かあったのかい？

洋一 (フィルター音)会社の話はよしてくれ！ とにかく今、おれはだれとも会いたく
ないんだ。教会もしばらく休む。おれのことなんか構わないでくれ。

浩 (驚いて)え、一体どうしたんだい？ 何かあったんだらう。杉山、話してくれ
よ。

洋一 (フィルター音)うるさいなあ。ほっといてくれよ。どうせ希望の会社に入れた吉
川に話したって、おれの気持ち、分かるわけないだらう。当分、電話もかけな
いでくれ。じゃあな。

効果音 (電話を切る音)

浩 おい杉山！ 杉山ってば…。

音楽 (ブリッジ)

ナレーション そして次の日の朝――。

洋一の母 洋一、洋一、もう 7 時過ぎたわよ。早くしないとまた会社に送れるでしょ。全く
いつまでも学生気分でいるんだから。そんなことでは困るわよ。

洋一 うるさいなあ、毎朝毎朝。おれだってもう子供じゃないんだ。いい加減、おれの
ことはほっといてくれよ。(モノローグ)あーあ、家にいればおふくろがガミガミ
とうるさいし、会社に行けばいったで、面白くもなんともない仕事をさせられる
し…。なんでこう朝が来るのが早いんだらうなあ。もしあの会社に受かってい
ればなあ。あー、イヤだイヤだ。

ナレーション 洋一は、希望の会社、しかも入社する自信のあった会社から、不採用通知を
受け取ってからというもの、自信喪失し、担任の先生に勧められるまま、現在
の会社に就職することに決めたのです。しかし入社してから仕事に身が入ら
ず、ふさぎこむ日々が続きました。そのようなある日――。

音楽 (ブリッジ)

洋一(モノローグ) やれやれ、やっと終わった。さてと早く帰るかな。

女子社員 杉山さん、部長がお呼びよ。

洋一 はい。(モノローグ)なんだらうな？ (部長室に入り)失礼します。

上司 ああ、君か。そこに座りたまえ。(間)杉山君、君は会社に何をしに来てるんだ
ね？

洋一 ……。

上司 会社はね、学校とは違うんだからね。

洋一 はい、分かっております。

上司 分かつたらんよ、君は。これまでに何回遅刻したかね？ それにだ、仕事でもボケっとしている。仕事に全く身が入ってないんじゃないかね？ 一体君はやる気があるのかね？ どうなんだね？ やる気のない者を会社に置いておく必要はないんだからね。辞めたければ、いつ辞めても構わないぞ。何事も始めが肝心だ。明日からしっかり働いてもらわなきゃ困るよ。分かったかい？

洋一 はい。

上司 今日はもう帰ってもよろしい。

洋一 失礼します。(モノローグ)チキショー！ 何が「辞めたければ」だ。あんな会社、おれが好きで入ったんじゃないんだ！ それに、あんなつまらない仕事、やる気出して働けて言うのが土台ムリな話なんだ。あの会社に受かってさえいればなあ…。なんでおれだけが、こんな目に遭わなきゃならないんだ？ なぜなんだ？

効果音 (玄関の戸の開く音)

洋一の母 あ、洋一、お帰りなさい。今日はいつもより遅かったじゃない。どうしたのよ、その顔。ブスツとして。

洋一 うるさいなあ。

母 それより洋一、あなたにお客さんよ。さっきいらっしゃってね。もうすぐ帰ってくるだろうと思って、あなたの部屋で待っていただいているの。

洋一 いったいだれだよ。おれに客なんて。

母 教会の中野さん、っていったかしら。

洋一 中野さん？ 何しに来たのかな。

洋一 こんばんは。

中野 こんばんは。突然訪ねてすみません。吉川君からちよつと聞いてね。君のことが心配になって寄らせてもらったんだ。

洋一(モノローグ) 吉川のやつ、余計なことを…。

中野 吉川君、ずいぶん心配してたよ。

洋一 (小声で)吉川になんか、おれの気持ち分かるわけないんだ。

中野 どう。会社には慣れてきた？ 学校とは違って、毎日大変でしょ？ なんだか疲れてるようだけど、忙しいの？

洋一 おれの前で会社の話はやめてください！ おれ、今の会社、辞めようと思ってるんです。

中野 え、なんだって？ まだ入社して 1 か月とたつてないじゃないか。またどうして「辞める」なんて。

洋一 今の会社、おれが好きで入ったんじゃないんです。毎日毎日単調な仕事させられて、それに今日、「辞めたければいつ辞めても構わない」って言われたし…。

中野 そんなことぐらいで辞めるのかい？ それじゃ次の会社に行ってもまた、同じ理由で辞めなくなるんじゃないかな。わたしのことをちよつと話させてもらうけど、わたしは希望の会社に入れた。入社したころはもう夢中で働いたよ。だけどね、だんだんとその仕事も単調に思えてきて、その上、周りの人にもなじめ

なくなってきたね、「こんなはずじゃなかった。いっそ辞めようか」と思ったら、もうそのことばかり考えるようになったんだ。そして神様に「辞めたい」って叫んでばかりいた。

洋一　それで、辞めたんですか？

中野　いや、辞めなかった。思い余って、西山先生にそのことを話した。そしたら先生に「君は採用が決まった時、なんて言ったのか忘れたのかい？」って言われて、ハッとしたんだ。実はね、杉山君、わたしは会社を決める時、真剣に祈ったんだ。「主よ、わたしの進むべき道に導いてください」ってね。そして、今の会社に採用が決まった。その時わたしは、そこは神様に遣わされたところなんだって思ったんだ。

洋一　神様に、遣わされた…？

中野　そう。しかしわたしはいつの間にか、その一番大切なことを忘れていたんだなあ。自分の気持ちが先に立ってしまって、“面白い、面白くない”、“やりたい、やりたくない”、もっと自分に向いた仕事があるはずだ、なんて自分本位に考えて、“神様が与えてくださった仕事。主に遣わされた職場”ということをついつの間にか忘れちゃってた。わたしはその晩から、“今の仕事を一生懸命に、感謝してできるように”って、毎日、祈り始めたんだ。

洋一　“今の仕事を感謝する”…。おれにはそんなことできません。

中野　うん、難しいだろうね。だから祈るんだよ、杉山君。祈って自分を変えていたくんだ。自分が変えられたときに、周りは変わっていくものなんだよ。

ナレーション　洋一は中野さんに自分の持っている問題をすべてぶちまけ、中野さんは時間をかけてその一つ一つに答えてくれました。洋一はその夜、久しぶりに、一人、声を出して祈りました。

洋一　“神様から遣わされた職場”、“感謝して仕事をする。”——神様、助けてください。心からそう思えるように、僕を変えてください。

音楽　(BGM)

ナレーション　洋一はその時、あの孝江青キャンプでイエスを信じた日の翌朝、森の木々も空も、友の顔も皆輝いて見えた時の感動をふっと思い出しました。そして、「きっとイエス様があの時のようにしてくださる」、と心の中でひとりごちたのでした。

<完>